

感情社会学という暴力

—「生きられた感情」をめぐって—

崎山 治男*

本稿は、感情社会学が、その成立当初から批判されてきた「生きられた感情」をどのように調査研究の中で位置づけるべきなのか、といった点について、「感情的社会学」(emotional Sociology)という観点からとらえなおすものである。まず既存の感情社会学がとってきた言語構成主義が、1) 生きられた感情を言語へと切りつめること、2) 認識論として「本当の・自然な」感情が疎外されているという立場に立っていたことを確認し、それに対して調査者自らの生きられた感情経験を提示する感情的社会学の方法が例示される。その効果として「感情公共性」と名付けうる場や対話的構築主義という調査論と親近性を持つものであることが指摘される一方で、この「感情的社会学」もまた、「本当の・自然な」感情が疎外されているという構図を土台としていることが暴かれる。

キーワード：感情社会学、感情的社会学、「生きられた」感情、社会調査と暴力性、感情公共性

はじめに—感情社会学というプロジェクトと調査・記憶

感情を社会学的研究の対象に据える、あるいは感情が社会学という領域の対象に本格的に¹⁾取り込まれたのは、それほど新しいことではない。現在、さまざまな角度から取り組まれている感情社会学の／ないしはそれに影響を受けたプロジェクト—感情労働論、感情の商品化論、心理主義論、社会運動論、感性の社会史、逸脱行動論等々の源流となる著作は、1970年代後半から80年代前半に刊行されたさまざまな著作に端を発している。また、学問的制度化という側面をみるならば、アメリカ社会学会において

感情部会が登場したのも80年代後半である。

だが、こうした点を逆にとらえるならば、この時期の時代背景と学問的潮流とが、感情社会学の登場と隆盛に適合的であったとみることもできよう。感情社会学の提唱者の一人であるケンパーは、この点について時代背景をあげている。彼は具体的に「より洗練度が増した組織的合理性に対するニュー・エイジ運動にみられるような、自己の表出的側面や自己そのものへの注視、といった抵抗運動が存在していた。それにもかかわらず多くの社会学者は主体の認知的側面のみ注目し、感情はサイコアナリシスや通俗的な文化的人間学といった疑似科学の領域へと追いやられていた」[Kemper, 1990, p.3]ことがあったとする。その状況の中で、「主体の合理的側面のみに着眼することの問題性についての疑問がうねりとなり、感情が再び、学問

* 立命館大学産業社会学部准教授

の研究に際して正当かつ重要なトピックとなる」[Kemper, 1990, p.3] ことが求められ、その中で「感情社会学は、その時代背景に呼応し、合理性対感情性という従来の社会学の単線的な論理に攻撃を加え、自己の表出的側面への抑圧が高まる点に焦点を定めることによって成立してきた」[Kemper, 1990, p.4] と述べる。

つまり、感情社会学という営みはその成立当初の意図として、自己の「本質」を表す（とわれわれが考える）感情経験を社会学という社会科学の領域の中に引き戻しつつ、かつそれが疎外されているという図式を展開することによって成立したものである。

この疎外論図式を実証的に展開し、感情社会学の経験研究を強力に推し進めたのがホクシールドの有名な感情労働概念と、それにとまなう心理主義化の進展という視点である。それをホクシールドは、二重のものとして描き出す。第一のものが、フライト・アテンダントへの実証研究を素材としながら描き出される感情労働における自己疎外、すなわち労働現場で感情の表出・保持を一定の型に管理されることによる自己感情からの疎外である。第二のものが、セラピー文化の隆盛の中で、感情労働からの癒しとして自己感情を保とうとする営為が、心理学的な知の枠内に留まるものであり、自己感情からの疎外を加速させることである。

この疎外論図式が、個々人の感情経験をある一定の型に切り取るという認識論的な構えによって成立していることをここで確認しておこう。感情労働の定義としてホクシールドは、「公的に観察出来る表情や身体的表出を職務に適合的なように作り出すための感情管理である。その時、個人の感情は賃金をえるために売られ、『交換価値』を有する。」[Hochschild,

1983, p.7 強調引用者] と定義している。ここで彼女が、感情労働の調査にあたってメルクマールとしているのは、観察者から言語化してみることができる感情経験である²⁾。

さらに感情労働での疲労や、広く対人関係での疲弊・スキルの向上を目指す欲望から生じるセラピー文化の隆盛についても、ホクシールドはそれが「本当の」自己感情をめぐる無限の循環論法に陥ることに加え、個々人の感情経験を一定の型に切り取る構図を指摘して「それは、〈企業〉による感情の利用と、それを継続させるためになされる感情の組織的訓練にはじまる（中略）。自然な感情を賞賛する現代の価値に通じる唯一の手がかりは、心理療法の普及である」[ibid, p.192 強調引用者] と語る。つまり、心理主義化を促すセラピー文化は、前述した感情労働の影響の下、心理療法にみられるように個人の感情経験を言語化した上で一定の方向へと誘導することによって成立すると見なしている。

このように、調査者が対象者の感情を言語化し、実定することを前提とする疎外論的な図式は、たしかに前述したような感情社会学という営為が持つ方向性とマッチした。そのため、感情社会学の実証研究と現代社会批判の大きな潮流になると同時に³⁾、方法論的な方向も導いていくこととなる。

さて、感情社会学の方法論の内部には、「実証主義—構成主義論争」として当事者によって定義され、後に総括されていく論争がある。その論争の主要な論点は、感情経験に関する生理学的影響の多寡といったことと、それに付随する感情経験に関する解釈のあり方であった。この論争の詳細はさておき⁴⁾、最終的に感情社会学の論者たちの多くは一程度の差はあれ⁵⁾—感

情に関する言語的構成主義を採用していくこととなる。

それは一方では、感情の「社会性」という感情社会学の生命線に立脚するならば、相互行為場面における言語行為に着目する—もちろん、言語に翻訳可能な身体的な表出行為も含まれる—という理論的な必然性もある。だが他方で、それは前述したような疎外論的な構え、つまりは感情と「本当」の自己との対関係を起点とし、それが現代社会において二重に疎外されているありさまを分析することを欲する点に学問としての存立基盤をおいた、感情社会学が元々持っていた志向性に—良くも悪くも—忠実であろうとする姿勢による所も大きい。

かくして、感情社会学のメインストリームは、いわば疎外論と言語的構成主義とのカップリングの中でその理論的・経験的研究を推し進めていくこととなった。だが、この方向性は人々の感情経験に関する暴力を持たないだろうか。つまりは、感情経験を相互行為場面という共時的な次元における言語行為に還元してしまうことの暴力性であり、また、ある種の感情を疎外と規定していく立場が持つ暴力性である。

本稿では、感情社会学の方法論・学説史をめぐる論争の中に埋もれてきた批判を導きの糸としつつ、感情経験「を」分析することの暴力性、感情経験「に」私たちが魅惑されることの暴力性について検討してみたい。

I. 生きられた感情経験という問題圏

このような疎外論と言語的構成主義とのカップリングが持つ、感情経験への射程の限界そのものは、比較的早くから注目されてきた。だが、一方ではそれは、前述した感情「社会学」

の批判的立場の維持、もう一方では構成主義—実証主義論争の中で、論点が未整理なまま不問に付されてきたように思われる。以下ではまず、この点に関するデンジン並びにエリスの批判を紹介、検討していきたい。

そもそも、われわれは自らの／他者の感情経験をどのように把握し、解釈するのだろうか。このような感情経験への解釈について、現象学の立場から発生論的にとらえたのがデンジンである。

彼はまず、感情経験の相互行為論的モデルを次のように述べる。まず、「現実の、あるいは想像上の状況における二者の間で起こる、対面的な共在という相互行為の段階」[Denzin, 1983, p.406]である「相互行為の流れ」(interactional stream)が根底にある中で、「個人がその態度を自己に向けたり、他者に向けたりする中で自己自身に向き返す」[Denzin, 1983, p.406]状態を表す「現象学的な流れ」(phenomenological stream)が生じるとしている。そして、この「現象学的流れ」という段階で、「自己自身に志向性に向けたり、他者へ志向性に向ける自己の相互行為から生じる」[Denzin, 1983, p.407]「自己感情」(self-feeling)こそが、感情社会学の主題であり、相互行為論的モデルに立った上での感情の説明様式であるとする[Denzin, 1983, 1984]。ここまでは、前述した感情社会学のプロジェクトと齟齬をきたすことはない。

しかしデンジンは、この「自己感情」の内実を分析する中で、言語的構成主義の立場と袂を分かたず。彼は「自己感情」について三層の構造を持つものととらえる。その第一のものが、「特定の生きられた身体に、感覚や刺激として与えられ」[Denzin, 1984, p.112]るものであ

り、「反省作用が向けられない」[Denzin, 1984, p.71] 段階を表す「感覚的感情」(sensible feeling)である。第二のものが、第一の層を起点とし、「個々人の現前を取り巻く人々に向けられ、彼らを巻き込む形で状況についての感情的な定義をコミュニケーションする」[Denzin, 1984, p.120] 中で「反省作用が向けられた」[Denzin, 1984, p.71] 段階を表す、「生きられた感情」(lived feeling)である。第三のものが、第二の層を起点とし、「感情に関わる規範や価値の現前に対する感覚の中で」[Denzin, 1984, p.122] 生じ、「主観的な感情の状態と独立に、感情の意図づけられた対象として与えられる」ものである「意図的な感情」(intentional feeling) —デンジン は、この例として感情管理を取り上げる一である。

デンジンは、「感覚的感情」に関しては、感情以前の「感覚」(sensation)であり、反省作用が介在しないという点で感情経験の社会学的視点から除外することを主張する [Denzin, 1984, pp.70-71, pp.111-112]。そして、「生きられた感情」と「意図的な感情」に関しては、「反省的な感情の意識化の中で、個人は、感情を誘導したり、向きを変えようとしたりする。感情語によるラベリングはここに含まれている」[Denzin, 1984, p.73] と述べるように、言語化されたものと見なす。

だが一方でデンジンは、「感情語は『生きられた感情経験』(lived emotion)の語彙を表す体系として必要」[Denzin, 1984, p.126]ではあるが、「生きられた感情経験そのものを表す語ではなく、それが抽象化され、観念化されたものでしかない」[Denzin, 1984, p.127]と述べる。こうした観点からデンジンは、「感情語」のみに焦点を当てることは、「感情を、感情語

がラベルされる石のような静態的な実体としてとらえる」[Denzin, 1984, p.26] ことによって、「社会学的探求から生きられた感情の研究を見失わせうるもの」[Denzin, 1985, p.233]と批判する。

その上で、感情研究の代替案として、「個人が生きられる感情を通して、出来事や人々に意味や価値づけを与えていく」[Denzin, 1984, p.76] 過程で、「感情が生きられ、記述されたあり方の再現性という点の説明の可否」[Denzin, 1990, p.86]を判断基準とする、感情についての現象学的・解釈学的説明 [Denzin, 1985, p.234]をあげる。それは、「感情を生きられた経験として分析するもの」[Denzin, 1990, p.86]であり、「原因論ではなく、感情経験についての記述的、解釈的分析」[Denzin, 1990, p.86]になるとしている。

つまり、デンジンにとっては感情経験への接近の手法としては、言語的構成主義はあくまでも仮の方法と位置づけられるに過ぎない。むしろそれは、個々人の記憶の集積体の上に現れる生きられた感情経験の一部分をカテゴリー化し、切り取る暴力として働くことが指摘されているのである。また同時に、疎外論といった措定点をおかずに感情経験を分析する必要性が明らかになる地点である。

こうした点を感情社会学というプロジェクトが抱えるイデオロギー批判、並びに広くは社会学的なアプローチにおける調査者—被調査者関係への批判にまで拡張したのがエリスである。彼女は、言語構成論的な立場に立つ感情社会学が「生きられた感情経験」(lived experience of emotions)をあつかってこなかったために、1980年代には「知的革命」(intellectual revolution)と見なされてきた感情社会学が、1990年代に入

ると「頓挫した革命といった様相を呈している」[Ellis & Flaherty, 1992, p.2] のだと批判している。その要因に関して、エリスは四つの点をあげている。

第一の批判点について。エリスは、「感情社会学で用いられている社会学的な調査モデルの数々は、感情を経験する主体と彼らが感じる感情経験との分離をもたらした。なぜならば調査モデルが合理的な秩序を前提として組み立てられ、表層の公的な自己のみに接近し、深層の生きられた自己と感情経験への接近を試みなかったからである。」[Ellis & Flahaerty, 1992, p.3] と述べる。ここでは、感情社会学の調査モデルが感情経験に関して—あるいは「感情」社会学において「も」—感情経験を操作する合理的行為者を措定してきたこと、並びに感情社会学がその対象とする感情経験を、言語化可能な層に限定し、それを与件として想定してきたことが問題視されている。

第二の批判点について。エリスは、「第二には、社会学者の多くは認知的過程に注目するが、それは、合理的行為者のモデルを設定することとなった。そのため、感情社会学における認知主義のバイアスは、感情社会学者を感情か認知か、どちらかを選択しなければならないという苦しい立場に追い込んだ。」[Ellis & Flaherty, 1992, p.4] と述べる。つまり、前述した点とあいまって、感情経験を分析する際に、感情経験そのものを分析するのか、あるいはそれを言語化する認知的位相を分析するのかのいずれか、といった二項対立図式に—そして、しばしば後者を優先することに—直面してきたことが問題視される。

第三の批判点について。エリスは、「社会学者は彼らの分析を、ミクロな過程と特定の歴史

的期間における個人の感情経験にのみ集中させてきた。それは、個々の特定の状況に対する反応のみが生きた感情経験に反映されるという誤解を生むと共に、感情経験を時空間に位置づける文化的・政治的な権力を無視するという帰結を生んだ。」[Ellis & Flahaerty, 1992, p.4] と述べる。つまり、生きられた感情経験にまつわる集合的な記憶そのもの、あるいはそこに沈殿する権力作用の層が無視されてきたことが問題視されている。

第四の批判点について。エリスは、「生きられた感情経験は、感情が『科学的に』分析されえないという理由から、社会学の領域の外部に位置づけられた。これは社会学者が、自然科学との関係、人文科学との関係、という双方との関係の間でおかれている緊張関係を反映している。また、それは研究者という共同体において特に典型的に、感情は抑圧されるか、個人的なものに見なされる背景を負っていることにもよる。」[Ellis & Flaherty, 1992, p.4] と述べる。つまり、感情社会学が「社会科学」である・あるうとする中で、個人の「感情語」をめぐる解釈実践（という「科学的」な対象）に照準を当て、感情経験の言語的構成性という主張を出さざるをえなかったことが問題視されている。

こうした、デンジンやエリスの批判点の根底に貫かれているのは、疎外論的な図式の魅力にとりつかれ、かつ社会科学であろうとする感情社会学という営みが、「生きられた感情」という、言語化されえない感情経験を排除する暴力によって成立してきたことへの違和である。その上で主張されるのが、個々人の「生きられた感情」に密着する方法であり、それに積み重なる記憶・身体的経験といった事柄を重視した、感情社会学の「再生」である。それをなしえな

い要因として、感情社会学者たちが持つ—あるいは、感情社会学者たち「でさえも」—いわば感情を合理・認知の枠組みへと回収しようとする認識論的な構えへのイデオロギー的な批判がなされているのである。

II. 生きられた感情経験の「尊重」：感情的社会学の可能性

こうした批判に続き、エリスはその代替案として「感情的社会学」(emotional sociology) という手法を提唱する。この公準についてエリスは、「第一に、われわれの研究の目的のために人々やある価値体系に込められた感情を感情的に分析すること。第二に内的な感情と外的な感情との反省作用の中で、われわれ自身の感情経験を社会学的分析対象とすること。第三に人々の日常生活の文脈で感情が語られるありさまに集中すること、そのために生活史的・主観的な観点から分析を開始すること」[Ellis, 1991b, p.125] と述べている。

ここで述べられている感情を「感情的に」分析することとは、必ずしも「社会科学的な」方法を放棄して、感情経験をただ記述することではない。その手法としてエリスは、「感情についての自己との対話によって達成され、語りという形式で立ち現れ、他者との対話を可能にする「内省」(introspection)」[Ellis, 1991a, p.32] を重視し、それを被調査者との間で行う「相互行為的内省」[Ellis, 1991b, p.128] を提唱する。つまり、疎外論という起点をおかず、被調査者のみならず調査者の感情経験をも分析の遡上にのせる。そのことを通して相互行為場面に参加する全ての人々の感情経験にまつわる記憶の層を尊重した感情社会学の実践を試みようとして

いる。そしてそれを通して、調査者—被調査者関係のみならず読み手となる読者にも感情経験を喚起させることを目指す。

エリス自身によるその実践例は、『最後の交渉』(Final Negotiations) と銘打たれた、パートナーへの愛着とその喪失体験をまとめたものに収められているが [Ellis, 1995]、本稿では、この「感情的社会学」という手法が、前述した既存の感情社会学への批判点に対してどこまで精度を持ちえているのか／いないのかについて、私自身の調査経験を元に—実際には、こうした手法はなされなかったが⁶⁾—検討を加えてみよう。以下にあげていく事例と、それに対する(既存の)感情社会学的分析については、紙幅の都合から本稿では対比として簡単な説明を付け加えていくが、その詳細は拙著 [崎山, 2005] の第六章をご覧ください。

まず、私が実際に聞き取ったデータとして、ある看護職の事例をあげよう。これは、主として簡単なフェイスシートの項目と、看護における困難についての第一回目のインタビューの数ヶ月後の再調査における、ある看護職 A さんのターミナル・ケアに関する語りである。

【事例1】泣いていたのは一年目だったと思うんですよ。そこで悔いがあったからだと思うんですよ。何かしてあげられなかったっていう。でも、一個でも自分の中で何かしてあげられたっていうのがあれば。やっぱり辛いけれども、今何ができるかって。その死に直面して、それこそ何もできないですよ。手を貸すとか何もできない。でもいること、一人じゃないんだっていうそれだけでも違うんじゃないかなって。

この語りについて私は、拙著の中では、「感

情社会的」な視点から、看護職の感情労働において、ある患者に対して専門的な職能にもとづいた一時にはそれを、看護職自身の思いから踏み越えてしまう—深い関わりを行っていく「個別主義」的な態度であり、それが医療専門職に要請される態度である、全ての患者に属性やコミットメントの度合いに左右されない「普遍主義」的な態度との葛藤を引き起こす疎外要因であると分析した。

それを感情的社会学という手法で調査・分析したならばどのようなことになるだろうか。

本稿の趣旨から述べていくと—このような表現が適切かはさておき—個人的な生活史の中でターミナルという状況を経験していた私は、この語りを聞いた際に、まず「泣いていたのは一年目」であり、「そこで悔いがあったからだ」といった語りや、「一個でも自分の中に何かしてあげられたっていうのがあれば」という語りに違和感を覚えた。より正確にいうならば、ある種の憤りと、看護職である彼女と私との差を気づかされた—距離感を感じた—ように思う。それは、報告者のターミナルにおける記憶に起因している。正確に呼び覚ますことは難しいが、「悔いがない」ターミナル、「一個でも何かしてあげられる」ターミナルという記憶の層が私自身になかったことに起因していたように思う。

実際には行われなかったが—こうした点で、エリスの批判は当時の私の態度には妥当するものであるだろうが—もし、私がそうしたことを調査という場面で発話し、記述したならばどのようなことが起きたであろうか。恐らくは最良のケースとしては—もちろん、このような語りや「拒絶」されることもありえるだろうし、知識や経験されてきた事柄の差から私の語りや封殺されていく語りの隠蔽が展開されることもあり

えよう⁷⁾—彼女のターミナルに携わってきた中での記憶と、報告者のターミナルでの記憶との異同が語られる中で、お互いのターミナルに関する記憶と、それに起因した生きられた感情経験の多相性が描かれたことであろう。その中には、この語りに集約されえない彼女と私のターミナルをめぐる記憶もまた、「感情社会学」という手法を用いた、前述したような形での「薄さ」や記憶に付随するカテゴリー化 [片桐, 2003] から解き放たれたものとして開かれていた可能性もまたある。

次に、同じ看護職 A さんに対して行った、数ヶ月後のインタビューを振り返ってみよう。この看護職には、繰り返しターミナル・ケアにおける感情経験についての調査を試みていた。それは、当時の調査目的がそこにあったためでもあるが、今振り返ると、前述したような違和感に導かれたものであったのかもしれない。

【事例 2】その人の人生が凝縮されている中で、何をしてあげたらいいかっていうのを考えることが出てくると思う。残りの人生をいかに充実したものにしてあげられるかっていうところで。（そうした関わりをしてきた患者が亡くなった際に）実際にすごく悲しい思っているのはあるんですけど。立ち直る時も、次の時にはどうしようっていう。私たちは仕事として他の人の死を見つめてくるとなると、その人が亡くなったこと、その間に行われたケアに対して、その人だけを見つめていては、他の人の亡くなっていく過程を踏むかもしれないし。他の人もまだ病院に残っているわけですから、それを考えると、先に進まなければならない。その亡くなられた方の死を見つめ直して、問題だと思ったことには、次の待っている人にはしないようにしたり、やり方を考えていく。

そこが、先に進むということですよ。

この語りについて私は、拙著の中では「感情社会学」という観点から時間軸というベクトルを差し挟んだ「個別主義」と「普遍主義」との調和と分析した。つまり、ある特定の患者に対して個別主義的な関わりを徹底することによって、「次の待っている人」という看護職という職務を考慮に入れるならば、普遍的ともいえる幅を持った患者に対する対応へと、個別主義が転化されるものと分析した。

これを、感情的社会学という観点から調査・分析するならばどのようなことになるだろうか。

前述したような事柄から実際には調査場面では語らなかつたが、この語りを聞いた際に私は、いくつかの感情経験をさまよった覚えがある。具体的には、「残りの人生を充実する」ことが含意する意味や意義についての疑問。「すごく悲しい思っているのはあるんですけど。立ち直る時も、次の時はどうしようっていう」感情が持てる・持たざるをえないことへの敬意と疑義。「先に進む」ことが可能であることへの驚きと懐疑等々。

もし、これらの私の感情経験を語ったならば、それはどのような姿を描いたであろうか。こうした語りから察知されるであろう、報告者の看護職・ないしはその職務への偏見への驚きや怒り。あるいは職務の困難さの訴え。この看護職がこの語りを行う際に念頭においていた特定の患者との感情経験の記憶の語り。あるいは、ある経験を記憶として封印しつつ、その知識在庫を生かすという手法そのものは一般的であることへの合意。このように、「感情社会学」的な手法ではたどり着けないであろう双方の生

きられた感情経験の多声性があからさまにはなかったであろう。

Ⅲ. 生きられた感情経験と語りの多相性：感情的社会学とは何か？

このようにみってみるならば、この「感情的社会学」という手法は、「感情社会学」が持っている、疎外論図式を基底に据えた上で対象者の生きられた感情経験をその図式の中にカテゴリー化するという、調査が持つ暴力性—感情社会学には限らず、社会学全般にもある意味では妥当する—を回避する優れた試みである、とみることもできるかもしれない。

それは、近年の社会学の臨床化や、調査倫理が問われてくる中でたどり着いた答えとして語られる、「共同行為としての調査」[似田貝, 1996], 「対話的構築主義」[桜井, 2002]という考え方や親和性を持っている。誤解を恐れずに単純化するならば、それらは、調査という営為が持つ根源的な暴力性—対象者の経験世界を切り取るということ・「記憶」の政治性を帯びてしまうこと⁸⁾・ひいては「記述」という営みそのものが否応なく持つカテゴリー化作用—に自覚的でありつつも、それをミニマムにするために、調査という営為を、社会学者が初発に持つ実践的関心に還元することなく、被調査者のそれとの対話の中で紡ぎ出そうとする営みである。感情的社会学という方法は、これに近い発想を持っているように思われる。だからこそ、次に思考されなければならない点は、それが感情経験であることが持つ意味であろう。

第一に考えられる点は、感情的社会学がその登場の地点で批判対象としてきた、言語的構成主義という方法と、感情との関わりである。前

述したように、感情的社会学は感情の言語的構成主義について、それが個々人の生きられた感情経験をとらえきれないという点を批判してきた。そこで提唱された代替的な方法論が、前章で紹介し、デモンストレーションしてみた「相互的内省」という手法である。

それはたしかに、疎外論的な前提を持った言語構成主義に立つ感情社会学の暴力性を脱色しつつ、それではとらえきれない感情経験の多声性を明らかにする方法ではある。だが、近年の社会調査に関わる議論の水準からみると、特に調査者—被調査者という関係における解釈実践の構築と、調査者自身もがそこに組み込まれる様態を描きつつ、被調査者の語りの多様性を浮かび上がらせるという点では、「共同行為」・「対話的構築主義」という発想とさほどの違いはない。むしろ、感情経験であるがゆえに、感情的社会学が批判対象としてきたはずの言語化されえない感情経験、われわれがアモルファスに感受しつつ、かつそれに影響されて行為を行っていると感じるそれを、描写・記述という水準においてそぎ落としてしまうという感覚をより強く持つだろう。

それならばむしろ、高橋が、われわれが意味世界を理解する様式を、言語媒介的な「言語知」と言語による把握が困難な「体験知」とに分割し、「感情語による感情の分割は、たしか分割という営み自体において感情の本質としての流れ、動きをとらえ損ねている。当事者からすると、これらの言葉は自分の経験に比し、あまりに一般的、抽象的な感じがする」[高橋, 1996, p.70]と述べるように、原理的に生きられた感情経験「そのもの」は決して扱えないと宣言する方が正しい⁹⁾。

では、どのように考えるべきなのだろうか。

前章で例示したように—そして私が看護職の調査では行わなかったように—私たちが何らかの事情から抑制する／してしまわざるをえない感情経験とそれにまつわる記憶を開示しあうことが持つ効果を考えてみるべきであろう。例えば前章で述べたように、私がターミナルに関わる看護職の語りを聞くこと。そしてそれに対して抱いた感情を表出し、お互いの記憶を精査しあうこと。これには言語というカベという限界がつきまとうことはたしかだが、私と看護職の「生きられた感情経験」を開示しあうことを通して、相互の主観の内奥を見つめ合うことに繋がるように思える。エリスが、相互行為の参加者のみならず記述の読み手に対しても「感情を通して、自己や主題に意識的に反省的に感情を喚起させる営み」[Ellis, 1991b, p.126]として感情的社会学の狙いを提示しているように、いわば共在者・共感者として自他のみならず読者をも巻き込んでいく営みとして—ひいては、「感情公共性」という空間へと至る方途の一つとして¹⁰⁾—感情的社会学は構想されている¹¹⁾。

おわりに

本稿では、感情社会学と調査・記憶とが交錯する地点として、言語的構成主義の立場をとる感情社会学が、感情経験を調査研究の対象とする際に含み込む暴力と、それを批判し、乗り越えようとする試みとして感情的社会学という概念・手法の検討を行ってきた。

その第一の要点は、感情社会学が言語的構成主義の立場をとってきた理由として、純粋な方法論・理論的な事柄に加え、感情社会学という営み自体が成立し、魅力を持つものとして受け入れられて来た背景に疎外論図式があることで

ある。これは、個々人の「本当の」感情という空虚な集合点をテコにしつつ、それが達成されない様を描き出すために方法論として言語的構成主義を要請してきた。

第二の要点は、感情経験の言語的構成主義には、私たちが生きる感情経験のある種の位相を切り落とすことにより成りたっているという批判があったことである。それは、前述した疎外論と言語的構成主義とのカップリングに加え、感情経験を認知の枠組みで回収し、かつ被調査者の感情経験を暴力的に一方的に収奪することでたれりとする感情社会学者の暗黙裏のイデオロギーにより、支えられているものである。それに対峙するものとして、感情的社会学という試みの提唱があった。それは「相互的内省」という調査者・被調査者の「生きられた感情経験」とそこに沈殿する記憶を暴き出すものである。その中で、感情社会学は、その疎外論的な批判を一旦は足止めしつつ、調査者自身の感情経験をもあからさまに照らし出していく方向が描かれる¹²⁾。

第三の要点は、こうした試みは近年、社会調査の中でその暴力性を排するために論じられる「共同行為」・「対話的構築主義」といった解と親近性を持ちつつも、それが感情経験であるがゆえに、調査者—被調査者関係を共在者・共感者へとより強く立ち現わせるものであるということである。共同行為論や対話的構築主義の中でもたしかにこれと類似のことが語られている。しかし、感情経験は、それがわれわれの「本当の」内奥を現すものであるという信念体系に支えられているがゆえにより強い効果を、調査という相互行為の参与者のみならず、読み手へと開く効果を持つ。あえて階層構造で現すならば、まずはこうした「相互的内省」にもと

づいた感情の相互開示—感情公共性といいかえでも良い—の上に、対話実践による相互的構築が折り重なるという構図を持つであろう。

だが、最後に留意すべき点は、われわれが感情的社会学とその手法としての「相互的内省」をこのように論じることができ、あたかもそれを真なるものとして受け取ってしまうことの背景に、それが批判対象とした疎外論図式と言語的構成主義とのカップリングを支える論理と同型のロジックが差し込まれているという点である。

つまり、われわれが感情的社会学の手法と「相互的内省」を通して共在者・共感者として立ち現れると考えてしまうこと。そしてそれが基底となって、「共同行為」、対話的構築主義という考え方がより有意味になると考えてしまうこと。これらの思考の背景に、疎外論と同型の論理として、感情経験こそが「本当の」自己を現すという強固な知がある。この構図を突き崩すことこそが—試みられてはきたが—感情社会学の課題であったはずである。しかし、それを正面から批判しようとした疎外論も、またその陥穽を批判した感情的社会学も、実は螺旋のごとくこのロジックに囚われている。

本稿は、実は感情社会学がこうした現代の感情文化をかえって支えてしまっている点を描き出すものでもあった。単純なる感情経験の疎外論や、それへの理論的な「正しさ」だけを追った批判だけで済む地点ではない地点へと感情社会学はさしかかるべきである。それはいわば、感情社会学の感情「社会学」を行いつつ、前述した磁場を掘り崩す—自身の立場さえも突き崩しかねない—困難ではあるが、より明確な問いを行わざるをえないことはたしかであろう。

付記

本稿は、2006年11月に開催された「関西学院大学 COE ワークショップ：記憶と社会調査」での私の報告原稿に修正を加えたものである。関係各位には、この場を借りてお礼申し上げたい。

註

- 1) 感情社会学の登場以前にも、社会学の立場から感情経験にアプローチしたものはたしかにある。代表的なものとしては、シェラーの羞恥論 [Sheler, 1933=1978]、性的対象への所有に関するデービスの嫉妬論 [Davis, 1936]、ブラウによる「好意」の交換過程による権力の生成論 [Blau, 1964=1974] 等がある。また日本でも、作田による世間体を起点とした恥の分析 [作田, 1972]、高橋による自己－他者関係での自己呈示と価値意識の共有を起点とした羨望・羞恥・嫉妬の分析がある [高橋, 1996]。しかし、これらの議論はいずれも個別の感情が生じる社会文化的な要因やパーソナリティ特性を導き出す方法をとっており、本文中で述べたような明確な指針を持って感情経験全般を問う70年代以降の「感情社会学」とは差異があるといえよう。
- 2) 具体的にホクシールドは、感情労働の「原材料」となる感情管理を導くものとして感情規則の存在を想定している。これは、日常生活での感情に関する権利と義務の感覚がルール・リマインダーとなりつつ、家庭での感情教育の中で内面化されるものとして措定されており、かつ感情労働の場面では企業組織体において規律・訓練されるものととらえられている。
- 3) もちろん、今日の感情社会学の展開はそれを一枚岩のものとしてとらえることができない程度には拡散されている。具体的には、感情労働・心理主義研究の他、介護、社会運動、逸脱論等にその知見が応用されつつある。詳細は拙著 [崎山, 2005] を参照されたい。
- 4) この論争の詳細については、拙著 [崎山, 2005] を参照されたい。
- 5) 言語的構成論の内部にも、大別するならば、言語的構成・解釈の対応物として、何らかの生理的機構を前提とするシンボリック相互行為論派と、それを前提としない厳格な立場との相違はある。詳細は、拙著 [崎山, 2005] を参照されたい。
- 6) もちろんこれには、調査の主眼が看護職の感情労働における疎外、といった点であったことが大きい。だが他方では、特に患者との関係における感情経験については、語るのを拒否されたり、公表を差し控えて欲しい旨を伝えられたこともある。
- 7) 例えば岡原は、エリスの感情的社会学という概念を評価しつつも、その相互行為的内省という方法については、調査者－被調査者関係の平等性を無前提としていることや、あくまでも調査に必ず付随する介入・記述という暴力に無自覚であることを批判している [岡原, 1998, p.1998]。
- 8) 調査・語りと記憶、並びにそれらの政治性という点については、記憶そのものが社会的に構築される際の政治性 [Halbwachs, M. 1950=1989]、「語り」の中に登場しえない／語りえない記憶 [浅野, 2001] の政治性などがある。
- 9) この種の「言語」による原理的な把握困難性については、感情経験に限った事柄ではなく、狭義ではある事柄を認知し、カテゴリー化する社会学の営み全般 [片桐, 2006] に当てはまるだろう。
- 10) この感情公共性という考え方は、①従来の理性的討議空間としての公共性と対置される形で——あるいはそこから排除されてきた人々や事柄を遡上にのせつつ——②現代社会における感情の管理・統制を穿つ空間として構想されているものである [崎山, 2005, 2008]。
- 11) ここで述べていることは、決して調査論で語られるラポールと同一のものではない。抑圧されている／抑圧されるべきものだとされる感情を表出しあうことは、時には関係の断絶というコンフリクトに至ることもありえる [岡原, 1998]。だからこそ、それを回避する方が構想されるべきである [崎山, 2005]。
- 12) 本文中でも記したように、私は感情的社会学という手法に全面的に賛同しているわけではな

い。仮に現時点での言語的構成主義と感情的社会学という「切り分け」を是とするならば、第三節で例示したように、それは異なった射程を持ち、異なった解釈を行う方法論であるといえるだろう。さらに、両者ともに共通の磁場に立っていることを反省的にとらえる必要があることはいうまでもない。

文 献

- 浅野智彦, 2001『自己への物語の接近』勁草書房
- Blau, P. 1974 *Exchange and Power in Social Life*, John Wiley & Sons, Inc. = 1974塩原勉他訳『交換と権力：社会過程の弁証法社会学』新曜社
- Davis, K. 1936 “Jealousy and Sexual Property”, *Social Forces*, 14, pp.395-405
- Denzin, N. 1983 “A Note on Emotionality, Self and Interaction”, *American Journal of Sociology*, 89, pp.402-409
- , 1984 *On Understanding Emotion*, Jossy-Bass Publishers.
- , 1985 “Emotion as Lived Experience”, *Symbolic Interaction* 8-2, pp.223-240
- , 1990 “On Understanding Emotion: The Interpretive-Cultural Agenda”, Kemper, Th.D. (ed.) *Research Agenda in the Sociology of Emotion*, State University of New York Press., pp.85-116
- Ellis, C. 1991a “Sociological Introspection and Emotional Experience”, *Symbolic Interaction*, 14-1, pp.23-50
- , 1991b “Emotional Sociology”, *Studies in Symbolic Interaction*, 12, pp.123-145
- , 1995 *Final Negotiations: A Story of Love, Loss, and Chronic Illness*, Temple University Press
- Ellis, C. & Flaherty, M. G. 1992 “An Agenda for the Interpretation of Lived Experience”, Ellis, C. & Flaherty, M. G. (eds.) *Investigating Subjectivity*, Sage., pp.1-13
- Halbwachs, M. 1950 *La Memoire Collectives*, P.U.F = 1989小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社
- Hochschild, A. R. 1983 *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press.
- 片桐雅隆 2003『過去と記憶の社会学：自己論からの展開』世界思想社
- , 2006『認知社会学の構想：カテゴリー・自己・社会』世界思想社
- Kemper, Th.D. 1990 “Themes and Variation in the Sociology of Emotions”, Kemper, Th.D. (ed.) *Research Agenda in the Sociology of Emotion*, State University of New York press., pp.3-26
- 似田貝香門 1996「再び『共同行為』へ」『環境社会学研究』2, pp.50-60
- 岡原正幸 1998『ホモ・アフェクトス：感情社会学的に自己表現する』世界思想社
- 崎山治男 2005『「心の時代」と自己－感情社会学の視座』勁草書房
- , 2008「感情公共性という構想」金泰昌・西原和久編『公共哲学・グローバル化の中の他者と感情』（近刊予定）
- 桜井厚 2002『インタビューの社会学』せりか書房
- 作田啓一 1972『価値の社会学』岩波書店
- Sheler, M. 1933 *Über Scham und Schamgefühl*. Der Neue Geist Verlag. = 1978浜田義文訳「羞恥と羞恥心」『シェラー著作集15』白水社, pp.11-114
- 高橋由典 1996『感情と行為：社会学的感情論の試み』新曜社

Toward the Consideration of the “emotional” Sociology

SAKIYAMA Haruo *

Abstract: The following discussion presents the ambivalent relationship between the linguistic theory of sociology and the meaning of emotions under the circumstances facing the sociology of emotions. At first, I show that the sociology of emotions uses the double meaning of alienation theories, in other words it changes “lived” emotions to linguistic ones and it focuses on “true” self-emotions that might be alienated.

I introduce and show the method of “emotional sociology” as a countermeasure for such tendencies. Through this, I show how the method of emotional sociology sometimes makes our inner voice clear and opens possibilities in the public area through emotions. Moreover, it is similar to today’s research theory that is called interactive social constructionism.

From these considerations, I show the positive aspect of “emotional sociology” to some degree. However, I also show that it cannot avoid the perspective of alienation theory that researchers introduce unconsciously, because the tendency to think of “raw” feelings as valuable things has no backing evidence. We must have a reflexive attitude for our research and thinking.

Keywords: Sociology of Emotions, Emotional Sociology, “lived” emotional experience, social research and violence, public arena of emotions

* Associate Professor, Faculty of Social Science Ritsumeikan University